

研究種目：基盤研究 (C)
研究期間：2008～2010
課題番号：20520106
研究課題名 (和文) 図像としてのカール・マルクスの成立とその受容・変容に関する研究
研究課題名 (英文) Analysis of Image-Changes of Karl Marx in the caricature

研究代表者
窪 俊一 (KUBO SHUNICHI)
東北大学・大学院情報科学研究科・准教授
研究者番号：50161659

研究成果の概要 (和文)：本研究は、様々なメディアの中で流布している「カール・マルクス」という哲学者・経済学者の視覚的イメージが表現されている「図像」において、使用されているマルクスの図像がそもそもどのような種類のものであり、それはどの写真・肖像画に基づくのかを確定し、それがカリカチュアなどの技法によってどのように表現されているのか、また、それは時代・地域・メディアによっていかなる差異を生み出しているのかを分析・解明することを試みるものである。

研究成果の概要 (英文)：The Aim of this research is collect and analyze the photos and pictures of Karl Marx, which are widespread in the world and expressed in different forms of media. On which photos and pictures are based this images? By which techniques are expressed this pictures? How different are they represented? How different are they in different times, countries and media?

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2008 年度	1,300,000	390,000	1,690,000
2009 年度	1,000,000	300,000	1,300,000
2010 年度	1,100,000	330,000	1,430,000
総計	3,400,000	1,020,000	4,420,000

研究分野：メディア情報学

科研費の分科・細目：芸術学・芸術学・芸術史・芸術一般

キーワード：マルクス、イメージ、カリカチュア、コミック

1. 研究開始当初の背景

本研究はカリカチュアなどの視覚イメージに描かれた哲学者・経済学者カール・マルクスを分析しようとするものである。

日本ではマンガやアニメに囲まれての生活が当たり前のようにになっているが、それに比べると一コマ漫画、風刺画と呼ばれるカリカチュアは、ストーリー漫画の陰に隠れて、

あまり注目されることのないマイナーなメディアではないかと思われる。しかし他方、外国ではその反対であることもしばしばである。これに加えて、マルクスという人物のイメージも、歴史的、社会的、地理的、文化的にそれぞれ異なる。

哲学者カール・マルクスの現存する写真 (マルクスの最初の写真は1861年に撮られた) は、15、6 枚しか確認されていない。

しかしながら、この写真でさえ、どこで、誰が、いかなる経緯で撮影したものであるかは十分に解明されていない。現在流布しているマルクスの図像は、これらの写真にその源を辿ることが出来るものも多い。それらと並んで、しばしばマルクスを「偶像化」した無数の美術的絵画作品や、19世紀以来の印刷技術およびジャーナリズムの発展の中から急速に広まった芸術的・社会的かつ政治的メディアである「カリカチュア」の存在がある。これらのメディアの中でマルクスの視覚的イメージがどのようにして表現され、その表現がどのようにステレオタイプ化したのかは、興味深いテーマではあるが、政治的理由もあり、長い間あまり研究されてこなかった。しかしながら、旧東欧圏の崩壊と共に、1990年以、降様々なマルクス「図像」の存在が次第に明らかになりつつある。また、同時にこれらの図像は旧東欧圏の崩壊とともに、急速に消えてなくなる危険にも直面している。

2. 研究の目的

本研究は、カール・マルクスの思想、経済学そのものを問題にするのではなく、「カール・マルクス」という哲学者・経済学者の視覚的イメージが表現されている「図像」において、使用されているマルクスの図像がそもそもどのような種類のものであり、それはどの写真・肖像画に基づくのかを確定し、それがカリカチュアなどの技法によってどのように表現されているのか、また、それは時代・地域・メディアによっていかなる差異を生み出しているのかを分析・解明することを試みたものである。従って、本研究の対象とするものは多岐にわたるが、それらの図像における具体的なマルクス・イメージを問題にし、そのイメージの生成・機能・意味・歴史などを解明した。歴史の過程でマルクス・イメージのステレオタイプ化が生じており、その類型化も試みた。また、ベルリンの壁崩壊後、マルクスのイメージがどのように変化したのかをカリカチュアなどを通して解明することを試みた。

3. 研究の方法

(1) マルクス図像の収集

本研究代表者は、カール・マルクス関連のグッズ類を蒐集している個人蒐集家 H.ヒュープナー氏（ベルリン在住）の協力を得て、本研究を始めるに当たり、マルクス図

像の収集を開始していた。その成果は、2008年にマルクス図像を図書（"Grüß Gott! Da bin ich wieder!" Berlin 2008）をドイツで出版し注目を浴びた。この図書はヒュープナー氏のコレクションの一部を撮影・解説したものである。残りのコレクションの撮影を含め、以前から研究上のコンタクトのあるロシア国立政治・社会史アルヒーフ、アムステルダム国際社会史研究所の協力も得て、また、ベルリンのアルヒーフや図書館などで研究の基礎となる図像収集を行った。

これらのドイツ語圏を中心とするマルクス図像と平行して、日本の明治以降の新聞・雑誌におけるマルクス図像を同様に収集、分析することを試みた。

本研究では、これらの機関・個人の資料の図像を分析することにより、マルクス・イメージの類型を明らかにすることであった。

(2) マルクス図像の分類

これらの基礎的データを以下の領域に分類し、データベース化した：

- ① 1933年以前のマルクス図像
- ② 旧東ドイツにおけるマルクス図像
- ③ ベルリンの壁崩壊時期のマルクス図像
- ④ 1990年以前の旧西独におけるマルクス図像
- ⑤ ドイツ統一後のマルクス図像
- ⑥ マンガにおけるマルクス図像
- ⑦ 政治的ポスターにおけるマルクス図像
- ⑧ 肖像画・写真
- ⑨ 彫刻
- ⑩ ブックカバーのマルクス
- ⑪ 日本におけるマルクス
- ⑫ その他

(3) マルクス図像のデータベース作成

上記資料を整理してデータベース化し、書誌情報・分類情報・コメントなども追加してリンクさせたシステムのプロトタイプを構築することを試みた。将来、公開する予定である。

(4) マルクス・イメージの分析

上記図像資料を理解するためには、それがどのような歴史的・社会的・政治的・文化的コンテキストで描かれ・発表されたものであるかが重要となる。特にカリカチュアの成立には、その背景となる当時の社会・政治状況の分析が不可欠であり、また、なぜ人はマルクス図像をマルクスと認識できるのかとい

う認知のメカニズムとあわせて、いくつかのサンプル図像について詳細な分析を試みた。

4. 研究成果

(1) マルクス図像の特徴

マルクス画像に共通しているのは、ふさふさとたくわえられた顎髭、口が隠れるほどの口髭、側頭部に広がる長髪であろう。加えて、広い額、太い眉も特徴として挙げられる。これらの特徴は、彼の晩年の容姿に近い。我々がマルクスを思い浮かべるとき、ほぼこれらの特徴を含み、部分的に誇張されたマルクス画像である。若い頃のマルクスがほとんど描かれることはない。これは写真技術の発展と普及と関連があり、マルクスの最初の写真がマルクス 43 歳の時のものであり、当時の写真が「ポートレート」というパターン化された形式であったことにも起因している。

(2) マルクスの写真

歴史はそれほど多くのマルクスの写真を残しているわけではない。モスクワのアルヒーフには、マルクスの 15 枚の写真 (12 枚のオリジナルと 3 枚のコピー) が保管されている。マルクスは 1861 年 (43 歳) に最初の写真を撮った。これは偶然ではない。写真の撮影時期は、写真技術の発展に対応している。1851 年になって初めてアーチャーとフライによる写真の安価な焼き増しのためのコロジオン法が特許申請され、この方法は 1882 年まで支配的な方法となった。これ以前の焼き付け法は、(1839 年来の) 銀盤写真法であり、ヨウ化銀を塗った鶏卵膜を用いる Ripce de Saint-Victor が 1847 年に発展させた方法であった。1854 年以降、„carté de viste “という書式が肖像写真で用いられるようになり、大量に普及した。例えば 1846 年にベルリンにはわずか 18 人の写真家しかいなかったが、1860 年には 94 人になった。技術的可能性と写真家の数とともに 1 枚あたりの価格もますます安くなった。またマルクス一家の金銭的なゆとりも重要である。一家の財政状況は、1850 年代にはこうした遊びを簡単には許さなかったし、1840 年代や 1850 年代にはむしろ非現実的にさせていた。

(3) マルクス画像 1,500 点の収集

本研究では、ほぼ 1,500 枚にも及ぶ画像を収集した。これらの図像・カリカチュアの多くはヨーロッパのものであるが、ラテンアメリカのものもある。全体の 3 分の 2 はドイツのもので占められている。約 40 枚は 1933 年

以前のもの、約 150 枚は 1949 年以後の西ドイツ、120 枚は旧東ドイツのものである。1990 年以降のものも約 100 枚含まれている。本研究では、これらのカリカチュアをテーマによって分類して整理した。

(4) マルクス・カリカチュアの分析

① 「共産党宣言」と「資本論」

マルクスの著作の中でも、「共産党宣言」と「資本論」はしばしばカリカチュアに描かれている。例えば、資本や資本主義、資本家に対する著作の影響力の大きさがうかがえる内容が多い。つまり、資本と労働の対決が描かれていることが多い。

他にも、「世界の労働者よ、団結せよ！」という「共産党宣言」のスローガンは、非常に多くのカリカチュアに登場する。

② 偶像としてのマルクス

マルクス・カリカチュアは、ただ単に髭をたくわえた顔だけでマルクスと認識されるわけではない。様々な場面、比較、比喩的表現などでマルクスであることが強調される。その際、マルクスが比較されるのは神話的人物・歴史的人物たちである。

例えば、「繋がれたプロメテウス」として描かれたマルクス図像がある。これは、マルクスが編集長として仕事していたケルンの「ライン新聞」の発禁に関連する最初のカリカチュアである。プロイセンの文部大臣アイヒホルン (リス) として描かれているが、プロメテウス (マルクス) を鎖に繋ぎ、このことをラインの町々が嘆いているという構図だ。ここでは活動を金にされた批判的ジャーナリストとしてのマルクスが描かれている。

他にも、1834 年にデンマークで描かれた「天オクラブ」で演説するマルクスを偶像化して描いた図像がある。ルソー、ヴォルテール、ホルバッハ、レッシング、ハイネ、ゲーテなどそうそうたる世界史上の巨人たちの中に立って演説する構図である。

また、神やイエスと論争・対峙するマルクスを描いたカリカチュアが存在する。フランスのジャン・エッフェルが描いたあるカリカチュアでは、イデーの楽園で哲学者たちが世界について語り合っており、マルクスが神に次のように言っている：「まあ、あなたが世界を創ったとしても、そろそろ変えないといけないんじゃないですか。でもそっちは私に任せておいてください！」また、1981 年の

カリカチュアでは、マルクスが世界の創造についてイエスと論争している。そこには次のように書かれている：「そしてマルクスは考え抜かれた計画に沿って自分に似せてプロレタリアを創った。最初の男と女の労働者を創った。そしてマルクスは言った：見よ、私は様々な意識をお前達に与えた。その意識は全地上にその種を広げる。それは、お前達のいる地上の繁栄とは裏腹に、あの天上にいる者達を怒らせ、その権力から追放するのだ。」

③1989年/90年の政治変革におけるマルクスソビエトに依存していた国々における社会主義の崩壊を前にして、数多くのマルクスをモチーフにした絵が描かれた。例えば、あるカリカチュアでマルクスは「みんなには悪かったね！私のちょっとした思いつきだったんだけど」と謝罪する。1989年/90年の政治変革期におけるマルクス・カリカチュアは、社会主義に対する強烈な批判となっていると同時に、その批判は資本主義（商業主義）にも向けられている。

収集したカリカチュアでは様々な政治的な立場が表現されている。階級闘争に特徴付けられた作品、マルクスの歴史的な功績を認めるものから、彼の政治的な影響を否定し中傷するものまでいろいろな立場が描かれている。ヨーロッパにおける1989年/90年の政治的変革は特にカリカチュアにおいてははっきりと表現されている。そこではマルクスは「敗北者」の役割を割り当てられている。

④日本のマルクス図像

マルクス図像の中で、一番特異な位置を占めるのが日本の漫画である。日本では、一コマ漫画でマルクスが描かれることはあまりない。戦前においても、描かれたマルクスは欧米のマルクスのポートレートに基づくものであり、あまりヴァリエーションはない。戦後になってもその傾向は変わらない。戦後の日本の漫画文化を特徴付けるのはストーリー漫画であるが、それはマルクスも例外ではない。いしいひさいち（「現代思想の遭難者たち」）、須賀原洋行（「うああ哲学事典」）、ありむら潜（「日本お笑い資本主義」）などをその例として挙げることが出来る。「まんがで読破」シリーズの中のマルクスの著作やマルクスの漫画による伝記（「劇画マルクス」）もそうである。

もう一つ、日本のマルクス図像受容の特徴を挙げるとすれば、性的な内容をもつ漫画にマルクスが登場することである。数は多くないが、70年代の左翼運動の文脈で読むことの

出来る「マルクス・ガール」やロリコンマンガのジャンルに属するであろう「まるくすタン」などが挙げられるであろう。

日本においては、マルクスの図像そのものはそれほど重要ではないように思われる。より重要なのは、マルクスの「思想」であると言えるであろう。この思想を描くために、ストーリーが必要となる。その際、思想そのものも、しばしば、単なる素材・手段として描かれることも多い。

本研究はマルクス哲学・経済思想そのものを扱うものではないが、一般に流布しているマルクス図像（写真やカリカチュア等）におけるマルクスの図像イメージ分析という新しい視点を導入することにより、マルクス思想・哲学から、マルクスという人物像、社会史、経済史、受容史など多岐にわたる分野を含む総合的なマルクス理解が可能となる。また、なぜマルクス図像をマルクスと同一化できるのか、そのメカニズムを明らかにすることで、図像というメディアの特性の解明にもつながったと思われる。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計1件）

1、窪俊一、「費爾巴哈」章(馬克思恩格斯的手稿《德意志意識形態》)的電子版的編輯、《德意志意識形態》文獻學及其思想研究國際研討會論文集、査読無、2010年、pp.1-3

〔学会発表〕（計1件）

1、窪俊一、カリカチュアのマルクス、国際シンポジウム「マルクスの遺産」、2008年12月6日、神奈川大学

〔図書〕（計1件）

1、窪俊一、デジタル時代とマンガの読み方、関本英太郎（編者代表）「人文社会情報科学入門、東北大学出版、2009年4月、pp.149-166

6. 研究組織

(1) 研究代表者

窪 俊一 (KUBO SHUNICHI)

東北大学・大学院情報科学研究科・准教授
研究者番号：50161659